

神奈川県立川崎図書館における「クラスタ配置」の変遷

—NDCにとらわれない排架方法の模索—

内海 暁子

はじめに

神奈川県立川崎図書館（以下、当館）3階科学技術室の大きな特色のひとつは、1998年のリニューアル・オープンから始まり今日まで続いているクラスタ配置である。現在ほとんどの公立図書館で採用されている排架¹⁾法は日本十進分類法（以下、「NDC」）であるが、クラスタ配置とは、このNDCの枠を超えてテーマに沿って関連ある資料を隣接させる独自の排架法である。数字の組み合わせで主題を表現すると同時に資料の排架場所も特定することになるNDCは、大変有効な分類法と言えるが、その主題内容は1876年に発表されたデューイ十進分類法を基本にしているため、現代の学問体系にはそぐわなくなっている点も多い。このようなNDCの欠点を克服するために考え出されたのが、当館のクラスタ配置である。2013年度現在、「化学・化学工業クラスタ」、「コンピュータ・情報クラスタ」、そして「環境クラスタ」の3つのクラスタが存在している。日本の図書館界においては長年NDCが主流を占めてきた中、このクラスタ配置を採用している図書館は、神奈川県立図書館の「法令・判例」コーナー²⁾などの例があるものの、少数派と言えよう。

リニューアルから15年経ち、今ではすっかり定着しているクラスタ配置であるが、最初にそれを導入したいきさつはどのようなものだったのか。そしてクラスタという考え方自体はいつ頃から出てきたのか。これまでクラスタ配置は幾度か紹介されてきたが、当館における成立時の経緯およびその原理、またそれ以降の流れをまとめて記述した論考はまだない。本稿ではこのクラスタ配置に焦点をあて、その導入の事情を考察したうえで、

リニューアル当時から現在に至る 15 年間の変遷を時系列に沿って概観し、記録に残したい。また、NDC にとられない排架方法については、クラスタ配置以外のものも視野に入れ、随時触れていきたい。

1 クラスタ配置の成立

1.1 リニューアルまで

1998 年 4 月、開館 40 周年を迎えた当館は、「科学と産業の情報ライブラリー」としてリニューアル・オープンした。クラスタ配置はこの時初めて採り入れられたものであり、リニューアルにおける斬新な試みのひとつであった。したがって、クラスタの本来の概念を明確にするためには、このリニューアルという枠組みの中でそれをとらえ直すことが不可欠と思われる。そこでまず、1998 年までの流れを簡単に辿ったうえで、クラスタ配置が考案された経緯を探り、その概念を明らかにしたい。

1958 年、当館は 2 番目の県立図書館として川崎市川崎区に設立された。京浜工業地帯の中心に立地することから、当初は「工業図書館」として計画され、自然科学・工学・産業関係の資料を中心にサービスを展開していた。一方、当時はまだ近隣に公共図書館が設置されていなかったこともあり、周囲からは「地域図書館」としての役割を期待されていた。その結果、当館は「公共図書館」と「工業図書館」のふたつの機能を担い続けることになったのである。

しかし 1980 年代に入ると、社会は高度情報化の時代を迎え、利用者の学習・情報ニーズは高度化かつ多様化する。その間に市町村図書館の整備が進み、1995 年には当館と同じ川崎区に市立川崎図書館が開館した。このような状況の中、周囲からは県立図書館に対してより専門的な機能を求める声が高まってくる。時代の変化とともに、図書館のあり方もまた問われることになったのである。

こうした社会的動向を受け、神奈川県教育委員会は県立 2 図書館の再編整備構想を打ち出した。再編整備についての調査検討は 1991 年度から始ま

り、数年にわたって念入りに調整が行われ、具体案がまとめられた。当館のリニューアル・オープンは、それを受けて実現したものである。

1.2 再編整備構想におけるクラスタの概念

1998年のリニューアル・オープンを機に公にスタートしたクラスタ配置だが、その考え方自体は、リニューアルに先立つ数年にわたる再編整備計画の中で、繰り返し吟味、検討され、次第に具体化していったものである。

ここからは再編整備関係の報告書を年代順に調査することで、クラスタ配置の概念がどのように形成されていったのか見ていきたい。以下参考にするのは、県立2図書館の再編整備計画に関する当時の資料、すなわち1994年から1996年にかけてまとめられた『県立図書館（紅葉ヶ丘・川崎）再編整備基本計画検討報告書』³⁾、『県立図書館（紅葉ヶ丘・川崎）再編整備実施基本計画検討報告書』⁴⁾、および『県立図書館（紅葉ヶ丘・川崎）リニューアル計画』⁵⁾の3冊である。

1.2.1 『県立図書館（紅葉ヶ丘・川崎）再編整備基本計画検討報告書』（1994年）

既に述べたように、1991年度から県立図書館の再編整備についての調査検討が始まったが、1994年に神奈川県立の図書館（紅葉ヶ丘・川崎）再編整備基本計画検討委員会によってまとめられた報告書（以下『1994年の報告書』）は、「県民や利用者の学習活動・調査研究を積極的に支援できる神奈川県立の図書館らしい特色のあるテーマ性をもった情報拠点」⁶⁾という、新しい図書館の基本的な方針を明らかにしたものである。

ここではまだクラスタという言葉は見られないが、後にクラスタの概念へ発展してゆく着想はすでに輪郭を見せ始めており、それは新しい図書館に不可欠な要素として記述されている。すなわち、まずはじめに「利用者の課題発見や課題解決の支援」という目標が掲げられ、それを実現するための方策として、紅葉ヶ丘・川崎各館のテーマを生かした「新しい情報分

類体系」の開発と採用の必要性が挙げられているのである⁷⁾。この「新しい」という語が、19世紀の学問体系を基礎に置くNDCに対して用いられていることは言うまでもない。さらにこの独自の分類表を考案するにあたって、NDCだけでなく国立国会図書館分類表、JICST（日本科学技術情報センター）科学技術分類表、あるいは博物館等で採用されている地域分類表等を比較検討することも提案されている。

クラスタという名称は使われていないが、本報告書で言及されている「新しい情報分類体系」は、NDCには依拠しない、時代のニーズに沿った独自の分類という性質から見てとれるように、後のクラスタ配置の萌芽であると言ってよい。

1.2.2 『県立図書館（紅葉ヶ丘・川崎）再編整備実施基本計画検討報告書』（1995年）

前項で見た『1994年の報告書』を踏まえて、新しい図書館の具体的な機能についてさらに検討した成果をとりまとめたものが、この1995年に出された報告書（以下『1995年の報告書』）である。「テーマ性のある調査研究のためのニューライブラリー」⁸⁾という新しい図書館の基本的性格は、前年の報告と変わっていない。一方、その構成要素である新しい情報分類体系についてのプランは、前年と比較すると格段に詳細さを増している。何よりもこの『1995年の報告書』で注目すべき点は、「クラスタ」という語が初めて用いられていることである。「他の図書館との連携を保つため、NDCを維持しつつ、その欠点を克服しうるような新しい独自の分類単位であるクラスタ（cluster，群）を考案し、これによって新しい時代に対応した資料や情報の分類を行い、資料の配置方法（書架分類）にも適用する」⁹⁾。ここで初めて用いられたクラスタ（cluster）とは、そもそもぶどう等の房や群といった意味を表す英語で、化学やコンピュータの分野で使用されることが多い。図書館関係では聞きなれない用語だが、長尾真が著書『電子図書館』（1994年）の中で、分類のひとつの考え方として、類似したテー

マによる分類法すなわち「クラスタリングによる分類」¹⁰⁾に触れている例がある。長尾は未来の図書館における資料分類への応用を示唆しているのだが、それを先取りするかのような当館の計画は、独自性の高いものであったと言える。

『1995年の報告書』で示されたクラスタの素描は、リニューアル以降現在に至るまで採用されている形式とはだいぶ異なり、公開資料全体を大きく3つのクラスタへ分けるという大胆なものである¹¹⁾。具体的には、上層の「先端的クラスタ」、中層の「複合的クラスタ」、下層の「基礎的クラスタ」の3つの階層から成り立ち、各層はそれぞれ細分化される。すなわち、上層は「科学知の最前線」と「ハイテクノロジー」の2個、中層は神奈川が重視していく科学技術の各分野として、情報、エレクトロニクス、材料、エネルギー、環境、生命、宇宙、かながわの8個のテーマに分け、残った下層は科学系、技術系、産業系の3つのクラスタに区分する、という案であった(図1)。

このうち「先端的クラスタ」については、「先端性を失ったものは適宜、複合または基礎に戻す」¹²⁾というルールが明記されているが、実はクラスタ全体が可動的なものとみなされていることは、次の文からも確認できる。「クラスタによる分類は時代の変化に対応し、一定の年限(例えば10年程度)で見直すことも考慮に入れておく」¹³⁾。この可動性や柔軟性といった特質は、クラスタ配置ならではのものである。

『1995年の報告書』で提案されているクラスタの展開図が今日とは異なるのに対し、クラスタ関連資料の整理方法に関する具体案は、現行のものにかなり近い。NDCとクラスタのどちらの分類法からも検索できるように、データ入力の際は双方の検索コードを付与する方法が示されているが¹⁴⁾、これは本稿後半で詳しく見ていくように、現在の「コンピュータ・情報クラスタ」および「環境クラスタ」においても踏襲されている。

資料の配置についても同様である。次のような取り決めは、現在の排架ルールにほぼそのまま活用されている。「公開資料については、クラスタ別

に配置し、同一クラスタ内においては国内図書、外国図書、雑誌等の資料形態別に分け、日本十進分類表（原文ママ）（NDC）順に配置する。また、書庫内資料については、NDC 順に配置する」。同じく「クラスタを示すシール等を資料に貼付する」案も、現在のクラスタ作りに活かされている¹⁵⁾。

以上のことから、1995年というかなり早い段階で、実際の使用に耐えうる具体的なクラスタ案が、すでに存在していたことが確認できる。

○産業技術系の情報館のクラスタ展開図

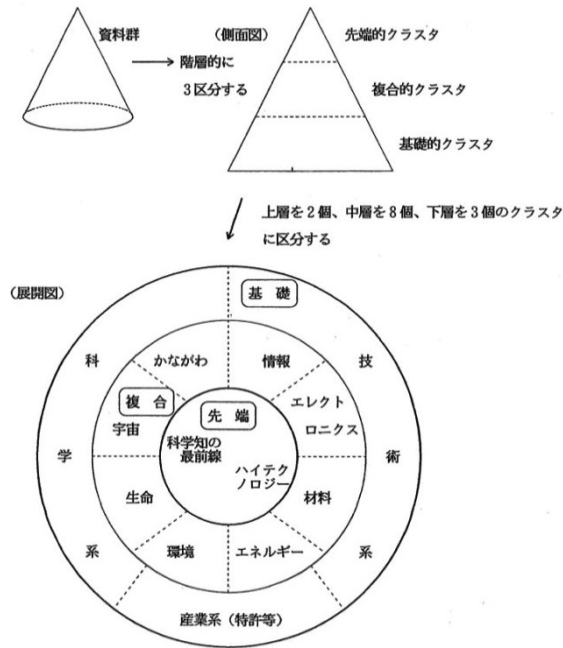


図1 クラスタ展開プラン（1995年）

1.2.3 『県立図書館（紅葉ヶ丘・川崎）リニューアル計画』（1996年）

前回までの一連の検討成果を踏まえたうえで、さらに行政面での課題整

理を行ったものが、1996年に発行されたリニューアル計画（以下、『リニューアル計画』）である。この段階になると『1994年の報告書』で想定されていた新規立地が、財政事情等の理由から困難であることが明記されており、これまでの報告書で示された方向性に着実に従いながらも、現施設における機能転換に主眼が置かれた計画となっている。

クラスタに関しては、その位置づけは前年までの案を継承しており、ここでも「課題解決型のリサーチ・ライブラリー」¹⁶⁾実現に向けて、資料の新しい公開方法、すなわちクラスタ配置の必要性が繰り返されている。それのみならず、展開予定の新しいサービスの筆頭に挙げられているように、リニューアルにおけるクラスタ配置の重要性が改めて浮き彫りにされている。

それでは具体案を見ていきたい。「先端的クラスタ」、「複合的クラスタ」、「基礎的クラスタ」の3層から構成されるというプランは前年と変わっていないが、それぞれの内容には若干変化が見られる。

「先端的クラスタ」については、「科学知の最前線」と「ハイテクノロジー」という2つのテーマに替わって、いくつかの特定主題から時宜に適ったテーマを選ぶ形となった。いわばトピックス的なクラスタと言えよう。柔軟にクラスタを形成するという基本姿勢は変わらない。

「複合的」クラスタについては、具体的に挙げられている7個のテーマは前年のものとほぼ重なる。この中に、リニューアル・オープンで採用されることになる3つのクラスタの原型、すなわち「情報・通信・メディア」、「環境・防災」そして「化学・製造」がすでに含まれていることが確認できる。また、この『リニューアル計画』において新たに「辞書・辞典等も『複合的クラスタ』に準じて配架する」¹⁷⁾という注が加わったが、これも2010年度から現在まで継続して採用されている形態であり、当計画が実行に移された例と言える。

「基礎的」クラスタについては、科学・産業技術の基礎研究に必要な分野および「複合的クラスタ」に含まれないものから構成される、とされて

いる。したがって、公開資料全体をクラスタ別に排架する案が、この時点ではまだ残っていたことが分かる。

2 リニューアル・オープンにおけるクラスタ配置

2.1 閲覧室のレイアウト

1996年の『リニューアル計画』を受けて、翌1997年からさっそく具体的な取り組みが始まった。そして改修工事や資料の移動等の大掛かりな作業を経て、1998年4月16日、当館は「科学と産業の情報ライブラリー」として新たなスタートを切った¹⁸⁾。以下このリニューアル・オープンに焦点を当て、クラスタ配置を中心とする新たなレイアウトの形態、クラスタ配置の広報ならびにその効果について見ていく。

新規立地や大規模な改築を伴わない「ソフト面でのリニューアルとは、ある面で収集している資料の見せ方の工夫の連続でもあった」¹⁹⁾、と実際に作業に携わった若杉秀子が述べているように、リニューアル・オープンのポイントのひとつは情報の編集と加工にあった。その一環としてクラスタ配置が位置づけられるわけだが、詳細に移る前に、リニューアルで実行された全館のレイアウトの大幅な変更点を簡単に確認しておく。

「神奈川県知的所有権センター支部」として特許庁から指定されたことを受け、1階では一般図書室・こども室が廃止され、代わりに特許公報類等の工業所有権資料と工業規格が置かれた。また、青少年向けの自然科学・理科系の図書を集めた「やさしい科学コーナー」や、神奈川県域の科学技術関係資料をまとめた「かながわの科学情報コーナー」も設置された。このように特許が1階に移ったため、それまで「特許閲覧室」であった4階は、開館以来の重要コレクションである社史・労働組合史専門の「社史室」となった。そしてこれを機に、従来閉架であった社史を開架にした。これらのレイアウト変更はいずれも、クラスタ配置と同様に、NDCに準拠しない排架の工夫と言えるだろう。

従来から「科学技術資料室」であった3階は「閲覧室」と名を変えるが、

資料はそのままに、「見せ方」の工夫を最も問われ、試される場となった。

まず、「書店にない調査情報コーナー」が新たに設置される。これは通常の流通ルートにのらない研究・調査報告書、いわゆる灰色文献を別置したコーナーである。

図書資料については、公開資料全体をクラスタで再編する当初の計画からは大幅に縮小されたが、前年度からの試行期間を経て3つの資料群でクラスタ配置が採用された。それが、『リニューアル計画』の段階ですでに「複合的クラスタ」として候補にあがっていた「環境・防災」、「コンピュータ・情報・通信」そして「化学・化学工業」である²⁰⁾。当館の広報誌『PaReT』には、特にこれらの分野が選ばれた理由についての記載がある²¹⁾。「環境・防災」は「個人の日常生活から広く地球規模の災害危機まで、複雑に絡み合ったその影響が改めて問題視され、県政においても最重要課題の一つとして位置付けられている」点が、「コンピュータ・情報・通信」は「長年収集に力をいれてきている」点が、「化学・化学工業」は「利用が高く、基礎理論と応用が分かれていることの不便さが指摘され続けてきた」点が、それぞれ挙げられている。さらに、「灰色文献」、「かながわの科学情報」、「やさしい科学」の3部門を加えて、「計6つのクラスタで出発することになった」と記されており、当時はテーマ別にまとまりを持つ各コーナーが、それぞれクラスタとみなされていたことがわかる。

2.2. クラスタ配置の広報

『神奈川県立川崎図書館50年史』（以下、『50年史』）巻末に掲載されている「6 記事に見る県立川崎図書館」からは、当館のリニューアル・オープンが、図書館関係の雑誌や新聞等のマスコミによって大々的に取り上げられたことがうかがえる²²⁾。また、図書館広報誌『PaReT』、『こあ』、ならびに『科学EYES』を調べると、リニューアルでの変更点や新しいコーナーの紹介は、前年の1997年から早くも始められており、当時の職員が繰り返しPRに努めていたことがわかる。中でもクラスタ配置については、利用

案内やリニューアル後のPR用パンフレット「神奈川県立川崎図書館の所蔵資料とサービス」に説明入りで記載されており、各広報誌にも紹介記事が掲載された。

2.3 クラスタ配置の利用者評価

当館の新しい門出を演出する広報活動が繰り広げられていた一方で、クラスタ配置という初めての試みに対する不安が全くなかったわけではない。『こあ』に掲載された後『PaReT』に再掲されたクラスタ紹介の記事からは、NDCと独自に設定したテーマという「二重の体系を絡み合わせる」ことで、「思いがけない不都合」が生じることへの懸念が読み取れる。(例えば、利用者がクラスタ配置に気づかず、NDC順に書架を探したために目的の資料にたどりつけないケースや、同様の理由による職員側の誤排架などが考えられる²³⁾。)そして「当面は日常業務の中で利用者の反応、使い勝手、問題点等を洗い出し、良好な見通しのたった時点において、残りの部門へもクラスタを順次広げていけたらと考えてい[る]」、との記述がある²⁴⁾。クラスタ配置はある意味NDCという伝統に対する挑戦である。当面は試行段階として様子を見る、という慎重な姿勢からのスタートであった。

実際、新しいレイアウトについての利用者側の反応はどのようなものだったのだろうか。当館のリニューアルについて特集を組んだ『神資研』第32号には、見学者の感想が載っている。クラスタ配置についての指摘に着目すると、用語は初耳だが「着想は新鮮」²⁵⁾、「利用者の立場に立った一つの試み」²⁶⁾などと評する意見が大半で、一定以上の評価が得られたと考えられる。同じく「利用本位の方法」としてクラスタ配置を高く評価する村橋勝子は、これを「知識や情報の管理・整理に関する過去との決別である」とし、「従来の『生産者中心』『到達のための“手段中心”』の発想を、『利用者中心』『内容を利用する“目的中心”』に転換したことにほかならない」²⁷⁾と結んでいる。

一方、当館の利用者のほとんどが「自分の研究テーマを明確に持って来

館している」²⁸⁾点に着目し、それと絡めてクラスタ配置の利便性を挙げる西野一夫の指摘もある。このような利用者像は、リニューアル前と後のレファレンス件数等の指標を分析し、リニューアル後は「明確な目的を持ったユーザーではぼ占められるようになってきた」²⁹⁾と結論づけている大塚敏高の研究からも裏づけられる。つまりここで示されているのは、単に使い勝手がよいだけでなく、クラスタ配置が利用者の調査・研究のために有効活用されているという一歩踏み込んだ見解である。課題解決型のリサーチ・ライブラリーとして斬新で利用しやすい排架法を採用する、という再編整備構想の狙い通りの結果が得られたといつてよいだろう。

3 リニューアル以降のクラスタ配置

3.1 1998年～2005年 試行期

リニューアル・オープンで順調なスタートを切った3つのクラスタであるが、その後どのような変遷をたどったのだろうか。クラスタ配置を巡る動きに着目すると、1998年のリニューアルから2013年現在までは3つの時期に分けられる。『50年史』や閲覧室配置図を見ると、2005年まではリニューアル当初の形をほぼそのまま引き継ぎ、クラスタ配置に関して大きな変化はなかった。3つのクラスタの位置は、「コンピュータ・情報・通信クラスタ」(007, 547, 548, 549, 690)がカウンターから見て左前方の5門側、「化学・化学工業クラスタ」(430-439, 570-579)が反対の4門側に設置され、これは現在と同じである。「環境・防災クラスタ」(518, 519)だけは現在の位置とは異なり、分類コード地球科学「450」と隣接して置かれた。関係のある分野をなるべく近くに排架しようという配慮による。

3分野とならび、同じくクラスタとしてスタートした「灰色文献コーナー」は、書架6連を使いカウンター前に設置されたが、やはり2005年までは目立った変化は見られない。

リニューアル以降の数期間は、いわばクラスタ配置の試行期間であり、利用者、職員の双方にとっては、この新しい排架法への順応期間であった。

3.2 2006年～2010年 変動期

その後2010年までの5年間は、クラスタのみならず閲覧室の「見せ方」全体が毎年のように変化した時期である。2006年以降、3階閲覧室の名称も「科学技術室」へと変更となる。

まず「環境・防災クラスタ」に大きな変化が訪れる。科学技術や産業構造の進展に対応するため、2005年度から年度ごとに特定テーマを設定し、重点的・系統的に図書収集を図る「特定テーマによる選定」が始まっていた。2006年のテーマが「環境」に決まったことに連動して、翌2007年「環境・防災クラスタ」が「環境クラスタ」と名称を変えてリニューアルした。それに先立ち、書架の位置は前年度からカウンター前の最も目立つ場所へ移されている。

表1 環境クラスタ (2007年～2009年)

| 10のテーマ | 分類番号 |
|------------|-----------------------------------|
| ①地球環境 | 519 |
| ②自然保護 | 468～468.8, 519.8 |
| ③森林 | 650～654 |
| ④循環型社会 | 518.52, 519.7 |
| ⑤環境政策 | 519.1, 519.12, 519.13 519.15 |
| ⑥環境汚染 | 519.2～519.6 |
| ⑦くらし・まちづくり | 518, 518.1, 518.2 518.5, 518.8 |
| ⑧新エネルギー | 501.6 |
| ⑨環境教育 | 375, 519 |
| ⑩防災・地震 | 518.87, 519.9 |

社会的にも環境問題が注目を集めていた時期ということもあり、このリニューアルは、それまではまとめて別置していただけであった「518」、「519」の分類を、新たに10のテーマにグルーピングすることで、より体系的な書架を構成しようとする試みであった。その結果、NDC分類では3門から6門まで分散されてしまう図書が、同じクラスタのもとに集められることとなった(表1)。なお、防災のテーマはクラスタ名からは消えたが、10のテーマのひとつとして組み込まれることとなった。

データ入力に関しては、まず請求記号については、NDC分類の前にその資料の所属テーマに対応する1から10の数字が入力された。また、排架コードには「川3環」が付与された。これは「川崎図書館3階環境クラスタ」を意味する(図2)。ラベルに関しては、下段に所属テーマを示すスタンプが押されることとなった(図3)。NDCとクラスタ双方の検索コードを付与する案は、先に見たように『1995年の報告書』ですでに提示されていたものである。

| | | | | | |
|------|----------|------|--------------|-----|------|
| 資料形態 | 一般 | 書誌番号 | 8-0000521834 | 上 | |
| タイトル | 環境と生態 | | | | |
| 責任表示 | 戸良行 | | | | |
| 出版者 | 培風館 | | | | |
| 版表示 | | | | | |
| ページ | 198p | | | | |
| 大きさ | 26cm | | | | |
| 叢書名 | | | | | |
| 項番 | 資料/発注番号 | 館 | 請求記号 | 配架 | 資料区分 |
| 1 | 80776347 | 県川 | (2) 468 43 | 川3環 | 一般 |

図2 書誌・資料照会画面(環境クラスタ)



図3 公開図書のラベル

(環境クラスタ)

「環境クラスタ」のリニューアルと時を同じくして、2007年6月から7月にかけて「環境フェア2007」と題した催しが開かれた。1階閲覧室でも、財団法人国際生態学センターからの寄贈を受け、植物生態学関係の資料約800点を集めた「生態学コーナー」が、2006年度に新設されている。全館を挙げて環境をテーマとしたサービスに力を注いだ時期であった。

2007年度後半には、クラスタという名称はつけられていないが、それに類する試みとして「先端科学技術コーナー」がカウンター前に設置される。これは、先述した「特定テーマによる選定」の一環として、「先端科学技術」をテーマとして系統的に収集してきた図書資料を整備したものである。その新鮮さが魅力のテーマだけあって、本コーナーは約1年で終了したが、かつての県立図書館再編整備構想を思い返せば、そこで提案されていた「先端的クラスタ」がまさに実現した形であったと言える。

翌2008年度の動きとして注目すべき点は、それまで1カ所であったレファレンスブックコーナーを、4門側と5門側に分散させたことである。既に触れたように、「辞書・辞典等も『複合的クラスタ』に準じて配架する」³⁰⁾という『リニューアル計画』の項目が実行に移された例である。クラスタに限らず、同じ分類のレファレンスブックが近くに配置されている形は合理的なため、現在まで継続している。同じく今も存続し、その関連展示が毎回好評を博している「科学者の伝記コーナー」が新設されたのも、2008年のことであった。なお、1階閲覧室は2005年10月に「ビジネス支援室」としてリニューアル・オープンしているが、そちらには「実業家の伝記コーナー」が設けられている。

他方、2006年度から雑誌コーナーの一角に移されていた「灰色文献コーナー」は、2007年度を最後に終了した。継続して受け入れている政府の報告書や様々な研究機関の調査報告書類が次第に増加し、別置するより分類別に配置するほうが効果的となったこと、および行政資料のWEB公開件数の急激な増加が、その大きな要因と考えられる。

2009年度に入ると、「コンピュータ・情報・通信クラスタ」の思い切っ

た再編が実行される。まず、これまで同クラスタに組み込んでいた通信「690」を外して「コンピュータ・情報クラスタ」と名をあらためた。そのうえで、資料をテーマごとにAからEの部門に分け、さらに部門ごとに内容を細分化し、合計33の小テーマへと区分した。データ入力に関しては、環境クラスタの場合と同様に、請求記号についてはNDC分類の前にその図書の所属部門とテーマを示すアルファベットと数字が、例えばA1のように付された。排架コードは「川崎図書館3階情報クラスタ」を意味する「川3情」に決められた(図4)。ラベルについては、下段に所属部門とテーマを表すアルファベットと数字が、部門別に5色に色分けされたシールと共に添付された(図5)。同時に、書架にも色分けされたサインが置かれ、全体として非常にカラフルなクラスタへと模様替えされた。

| | | | | | |
|------|--------------|------|--------------|-----|------|
| 資料形態 | 一般 | 書誌番号 | B-0004577817 | 上位 | |
| タイトル | 人工知能と人工生命の基礎 | | | | |
| 責任表示 | 伊庭齊志 | | | | |
| 出版者 | オーム社 | | | | |
| 版表示 | | | | | |
| ページ | 254p | | | | |
| 大きさ | 21cm | | | | |
| 叢書名 | | | | | |
| 項番 | 資料/発注番号 | 館 | 請求記号 | 配架 | 資料区分 |
| 1 | 81563652 | 県川 | A1 007.13 74 | 川3情 | 一般 |

図4 書誌・資料照会画面(コンピュータ・情報クラスタ)



図5 公開図書のラベル
(コンピュータ・情報クラス)

このコンピュータ・情報分野のリニューアルは、IT技術の進展にともない多種多様なコンピュータ関連書籍が出版されている中、内容別にまとま

りのある書架分類を実現することは、NDC の分類番号では不十分という状況があり、また実務的な解説書にとどまらず、IT 技術の根幹に関わる理論書などにも目を配りたいという思いから、実施されたものである。

準備は前年度から始められ、まずこの年の特定テーマを「情報」と決めて重点収集を行い、同年9月、2008年以降に出版された最新の図書を排架した『「情報」コーナー』が設置された。集められた図書はこの時すでに5部門33テーマへと分けられており、この『「情報」コーナー』の設置が試行期間と位置づけられ、翌年の「コンピュータ・情報クラスタ」再編へとつながっていった。その結果、情報分野の各技術やテーマ別にまとまった書架分類が実現することとなった。またこの時期以降、当クラスタの一覧表はホームページにもアップされ、資料検索の利便性が大幅に改善された(図6)。

科学と産業の情報ライブラリー
神奈川県立川崎図書館

キーワード 蔵書検索

■ 両県立トップ ■ 県立(紅葉ヶ丘) ■ サイトマップ

利用するには
資料を探す
調べる・相談する
お知らせ
情報誌
活動評価・統計

ホーム > 資料を探す > 「コンピュータ・情報クラスタ」一覧リスト

「コンピュータ・情報クラスタ」一覧リスト

科学技術室(3階)にある書架スペース「コンピュータ・情報クラスタ」では、いわゆるコンピュータ書を分類(テーマ)別に配架しています。

このページは、各分類ごとの所蔵資料を一覧できるようにしたものです。貸出中などにより書架に資料がない場合でも、所蔵の有無を確認したり、予約をかけたりすることができます。

なお、「コンピュータ・情報クラスタ」にある資料は、比較的出版年の新しいもので構成しているため、**それ以外の古い資料や、書名等で特定の資料を検索する場合は、本ページ上部の「蔵書検索」か、資料検索のページで確認してください。**

A:情報科学 | B:コンピュータ・システム | C:プログラミング | D:データベース | E:アプリケーション

部門A: 情報科学

| 区分 | 分類名 | 概要またはキーワード |
|----|-----------|-----------------------------------|
| 0 | レファレンスブック | 情報科学、コンピュータに関する辞典、事典など |
| 1 | 情報理論 | 情報・符号理論、暗号等 |
| 2 | 情報と社会 | 情報と社会に関わる幅広い内容(産業、歴史、ルポルタージュ、伝記等) |

図6 「コンピュータ・情報クラスタ」一覧リストのトップ画面

先に行われた「環境クラスタ」の再編と同様に、「コンピュータ・情報クラスタ」のリニューアルは、類似したテーマのNDC分類をただ集めるのではなく、時代に対応した分類を独自に決めて整備するという意味で、本来のクラスタの概念にふさわしいものとなったと評価できよう。

変動期最後の2010年度には、ふたつの大きな動きがみられる。まず、10項目に分けられていた環境クラスタを6項目に編成し直したこと（表2）。

表2 環境クラスタ（2010年～）

| テーマ | 分類番号 | ラベル表示 | 内容 |
|--------|------------------------------------|-------|--|
| ①地球環境 | 519 | 地球環境 | 地球温暖化、オゾン層破壊、酸性雨、海面上昇、砂漠化 |
| ②自然保護 | 468～468.8 519.8 | 自然保護 | 自然保護法、里山、棚田、水資源保護、自然保全、生物多様性、生態系の破壊、生態学 |
| ③環境教育 | 375 519 | 環境教育 | 環境教育、環境思想、環境倫理学、環境社会学 |
| ④循環型社会 | 518.52 519.7 | 循環社会 | 環境マネジメント、リサイクルシステム、環境科学、省エネ・省資源、環境負荷低減技術 |
| ⑤環境政策 | 519.1, 519.12, 519.13 519.15 | 環境政策 | 環境法、環境計画、環境共生都市、環境アセスメント、環境保全 |
| ⑥環境汚染 | 519.2～519.6 | 環境汚染 | 公害問題、大気汚染、水質汚染、土壌汚染、海洋汚染、化学物質汚染、有害物質、環境騒音・振動 |

そして前年に1階から3階へ移していた「生態学コーナー」を解体し、新たに「植物・森林コーナー」を設置したことである。クラスタの名称はつけられていないが、植物関係の分類「470」と「650」をまとめた構成は「化学・化学工業クラスタ」と同じである。環境クラスタから外された4つの項目のうち、「森林」は新たに設置されたコーナーへ、「新エネルギー」は5門側へ別置され、「くらし・まちづくり」および「防災・地震」のうちの「地震」はNDC順に戻され、残る「防災」は4門サイドに別置された。

3.3 2011年～2013年 安定期

2011年度は3つのクラスタに特に変化は見られない。前年度のレイアウト変更の際に別置を作りすぎてしまった感もあり、この年はその整理・見直しに充てられた。その結果、工業経済・生産管理関係「509」の別置は残るものの、防災と新エネルギーはNDC順に組み込まれ、4門の自然科学から6門の産業までがほぼ分類番号順に並べられた。番号順に辿るとちょうど閲覧室を一周する形である。

なお、一年間別置されていた「509」は、翌2012年1階ビジネス支援室に移されることになる。従来から特許・規格資料を取り揃えていた1階閲覧室は、「ビジネス支援室」としてリニューアル・オープンした2005年以来、いっそうビジネス関連のサービスに力点を置くようになっていた。この移動は、工業経済・生産管理分野「509」が科学技術室よりむしろビジネス支援室にふさわしいと判断されたためである。これとほぼ同時に、1階に所蔵されている規格本体とは別れて3階に配置されていた関連図書約150冊を、より有効な形で提供できるように1階の「規格関連資料コーナー」に追加した。その結果、同コーナーには0門ならびに4門から6門までの分類が集められることになり、科学技術室のクラスタと同一の構造を持つこととなった。規格に限らず、特許、ビジネス関連資料、先に触れた実業家の伝記等をまとめて排架することで、ビジネス分野の利用者の利便性向上を図る1階閲覧室もまた、基本的にはクラスタ的な作りとなっている

ると言えよう。

2012年度に入ると、3階科学技術室では2009年度のリニューアルの形を基本としながら、「コンピュータ・情報クラスタ」が再度調整され、33の小テーマが38へ増やされた(図7)。

| 分類記号 | 分類名 | 主な内容 | 分類記号 | 分類名 | 主な内容 | |
|-------------------------|--------------------------------|--|----------------------|--------------------------------------|---|-----------------|
| A 情報科学 | 0 レファレンスブック | 情報科学、コンピュータに関する辞典、事典など | C プログラミング | 0 プログラミング全般 | システム開発、プログラミング手法等 | |
| | 1 情報理論 | 情報・符号理論、暗号等 | | 1 C/C++ | C/C++関連全般 | |
| | 2 情報と社会 | 情報と社会に関わる幅広い内容(倫理、歴史、ルビロ、クラウド、ロボ等) | | 2 Java | Java関連全般 | |
| | 99 その他 | 情報科学分野全般 | | 3 Windowsプログラミング | Visual C++, Visual Basic, C#, ASP.NET等 | |
| B コンピュータ・システム | 0 コンピュータ・システム全般 | コンピュータの仕組み、歴史、歴史等 | D データベース | 4 スクリプト言語 | Perl, PHP, Ruby, Python等 | |
| | 1 Windows | WindowsOS関連全般 | | 5 Web技術<書籍> | HTML, XHTML, CSS, JavaScript, XML等 | |
| | 2 UNIX/Linux | UNIX関連全般 | | 6 Web技術<コンテンツ作成・管理> | ホームページ制作ソフト、CMS等 | |
| | 3 MacOS | Mac (Apple) 関連全般 | | 7 モバイルプログラミング | スマートフォン及びタブレット端末等のアプリ開発・開発環境 | |
| | 4 構築・設備 | パソコンを構成する各ハードウェア、または設備的構築等 | | 8 システム・ソフトウェア開発 | ソフトウェアやシステムの開発・設計に関連するもの、オプジェクト指向、アジャイル手法、テスト、構築も、開発環境等 | |
| | 5 ネットワーク | ネットワーク及び通信全般に関する総論、構成、OS/DB構築等 | | 99 その他の書籍 | 1〜7以外の特定の書籍等 | |
| | 6 ネットワーク<プロトコル> | 通信仕様・規格、また、通信網を充てる技術 | | E アプリケーション | 0 データベース全般 | データベース全般に関する総論等 |
| | 7 ネットワーク<構成標準・策> | ネットワーク環境の構築と管理 | | | 1 SQL | SQL |
| | 8 ネットワーク<サーバ等> | Apache, DNS, Postfix等、ネットワークを構築するサーバ(応用ソフトウェア)に関するもの | | | 2 Oracle | Oracle関連全般 |
| | 9 セキュリティ | ネットワーク上のセキュリティとその管理 | | | 3 Access | Access関連全般 |
| 99 その他 | 各種OS、組み込みシステム等 | 99 その他のデータベース | 2、3以外のDBMSに関するもの | | | |
| ラベルの見方 | | | E アプリケーション | 0 パソコン操作・インターネット入門 | パソコン操作、インターネット活用等、入門的・総合的なガイド | |
| 007.63 | 書名:「Windows Vista マスターバイブル」の場合 | | | 1 文書作成・統合ソフト | Word、一太郎、Office等統合ソフト | |
| 2399 | | | | 2 表計算 | Excel、三四郎等 | |
| 情B1 | 分類:「コンピュータシステム(Windows)」 | | | 3 プレゼンテーション | PowerPoint、Aesee等 | |
| | | | 4 グラフィックス | Photoshop, Illustrator, Painter等 | | |
| | | | 5 DTP | InDesign, QuarkXPress, Acrobat, PDF等 | | |
| | | | 6 CAD | Auto CAD, Jiv cad等 | | |
| | | | 99 その他のアプリケーション | - | | |

図7 コンピュータ・情報クラスタ分類表・揭示用 (2012年～)

その理由として、当時のクラスタ再検討に関する素案には、当初の区分設定時には想定されていなかった新しい技術分野の台頭、ならびに開設当時の区分とは異なる分類への再検討の必要性が挙げられている。スマートフォンのアプリ製作のための開発環境やプログラミングについての解説書

などが、コンピュータ関連書の中で大きな位置を占めるようになってきた当時の状況が、その背景にあった。この素案は2011年度第2回資料管理会議で提案され、分類を細分化する際は枝番を使用せず、新しい番号を付与する方向で了承を得る。翌年3月には区分変更案がまとまり、データ変更作業が早急に進められたのち、2012年度から新しい区分表により運用が開始された。

それ以降の閲覧室のレイアウトは、2012年度の形をそのまま引き継ぎ現在に至っている。

3.4 クラスタと収集

すでに見てきたように、「環境クラスタ」および「コンピュータ・情報クラスタ」の再編においては、あらかじめ各々の分野を特定テーマに設定した重点的な収集が行われた。このようなクラスタ配置と収集との関係について、最後に簡単に整理しておきたい。

クラスタのテーマと連動した収集方針がはじめて示されたのは、1996年の『県立図書館（紅葉ヶ丘・川崎）リニューアル計画』においてである。それ以前の報告書では、資料の蓄積としての収集は、資料の見せ方としてのクラスタとは別の次元でとらえられていたが、ここではクラスタと関連づけた収集という両者を結びつけた提案がされている。次に引用するのは、収集分野の具体的展開として記述された部分である。「重点分野として、クラスタと対応した（下線筆者）情報・通信・メディア、宇宙・地球、環境・防災、生命、化学・製造、エネルギー&エレクトロニクス等に関するもの」³¹⁾。実は1994年と1995年の報告書においても重点収集分野についての記述があり、テーマに沿った資料の受入れという視点は存在するのだが、それはクラスタと結びつけられてはいなかった。ここに至ってはじめて、クラスタの概念が閲覧サービスのみにとどまらず、収集、蓄積といったバックヤードのサービスと連動するものとして、明確に位置づけされたと考えられる。

このリニューアル計画に基づき、2006年度から系統的な収集機能の充実を図るため「特定テーマによる選定」が導入され、重点収集された資料のクラスタ的配置が行われることとなった。まず、試行と位置づけられる導入前年度（2005年度）の「ビジネス」から始まり、「環境」、「先端科学技術」、「情報」の4テーマで実施された（表3）。

表3 特定テーマによる選定とクラスタ

| 収集特定テーマ | クラスタあるいはクラスタ的配置 |
|-----------------|------------------------------|
| 2005年度 ビジネス（試行） | 2005年度 ビジネス支援室（リニューアル） |
| 2006年度 環境 | 2007年度 環境クラスタ（リニューアル） |
| 2007年度 先端科学技術 | 2007年度 先端科学技術コーナー（設置） |
| 2008年度 情報 | 2009年度 コンピュータ・情報クラスタ（リニューアル） |

表からもわかるように、収集とクラスタ配置との間には明確な対応関係が認められる。両者の関係については、鈴木良雄が「川崎図書館の“クラスタ”の本質」として詳細に論じており、「収集する面から“クラスタ”をとらえると、“クラスタ”を設定した分野の資料の収集を誘導する意味合いがでてくる」、その結果「全館一体となったサービスの質の向上に貢献している」³²⁾と分析している。こうした視点から眺めると、見せ方という表層的な部分にとどまらず、収集部門と連携することでより効果的なサービスを可能とするような、図書館機能の中心に位置づけられたクラスタの役割が浮かび上がってくる。

「特定テーマによる選定」は2009年度の「エネルギー」までが計画されていたが、新たにテーマを掲げクラスタを設置するためには時間と人員が十分でなく、また既存のクラスタへの補充・維持が困難であるとの理由により、2008年度の「情報」を最後に終了した。とはいえ、それまで重点収集された資料が当館の特色ある蔵書群の骨格を形作ってきたことは事実で

ある。それ以降は、社会的要請に随時応えらえるよう、時宜に適したテーマの資料を補充していく収集方針が採られている。

おわりに

1991年に始まった両県立図書館再編整備構想からリニューアル・オープンを経て、その後の閲覧室のレイアウトの変遷を通覧すると、クラスタという概念を軸に置き、毎年のように新たな挑戦が繰り返されていたことがわかる。それはまた、再編整備案が見直しや検討を伴いながら、徐々に実現されていった過程とも言える。

もちろん、閲覧室の大幅なレイアウト変更や資料の再編成は、利用者だけでなく職員側にも戸惑いを引き起こし、時に混乱が長引く場合もある。また、構想を練るだけでなく、力仕事を伴う一連の作業に従事する職員側の負担は、決して小さくはない。だがこれらの根底にあるのは、県の再編整備構想で示されていた、科学と産業分野を専門とする「課題解決型のリサーチ・ライブラリー」への改革という明確な方針、そして使命感である。したがって、「科学技術の先端的領域等に関する特定主題へのアクセスの利便性等を図るため」³³⁾考え出されたクラスタ配置は、この転換において、極めて重要な位置を占めていたと言えよう。

現在閲覧室のレイアウトはようやく落ち着いたかに見える。だが、時代の変化や利用者の要求を常に把握して、それらに迅速に対応し、サービスを改善させるのが公共図書館の役目である。再編整備案の中にも「クラスタによる分類は時代の変化に対応し、一定の年限(例えば10年程度)で見直すことも考慮に入れておく」³⁴⁾と記されていた。これまでと同様に、利用状況および時代の要請と照らし合わせながら、クラスタの見直しや再編、新たな分野の開拓を視野に入れる必要は常にある。その際、原点、すなわちクラスタの概念を作り上げた再編整備計画に立ち戻ってみることもできよう。宇宙、生命、エネルギー等、かつてクラスタの候補として挙げられていた多様な項目の中に、意外なヒントが見つかるかもしれない。さらに、

テーマと連動した収集を行うことで、今後も科学技術系のリサーチ・ライブラリーにふさわしい体系的な資料の構築を継続していくべきであろう。

奇しくも現在、ちょうど20年前と同じように新しい県立図書館づくりの構想が再び始まったところである。その「新・図書館構想(案)」の中に「県立図書館既存資料のクラスタ的再編」、「川崎図書館の社史、規格、クラスタ等特色ある資料の配置」といった項目も含まれている³⁵⁾。クラスタの概念を活かすことで、よりよい図書館サービスを追求していきたい。

注、引用・参照文献

- 1) 一般的には「配架」の字が使われることが多いが、文部省の『学術用語集—図書館情報学編』により、本論考では「排架」の字を用いることにする。
文部省編. 学術用語集—図書館情報学編. 丸善, 1997.
- 2) 神奈川県立図書館では『県立図書館(紅葉ヶ丘・川崎)リニューアル計画』(1996年)に基づき、1997年4月から「法令・判例」コーナーでクラスタ配置を採用している。
大村典子. 新しい配架方法の試み—神奈川県立図書館の場合—. Library & Information Science News. 1998, no.95, p.10-14.
- 3) 神奈川県立の図書館(紅葉ヶ丘・川崎)再編整備基本計画検討委員会編. 県立図書館(紅葉ヶ丘・川崎)再編整備基本計画検討報告書. 神奈川県立の図書館(紅葉ヶ丘・川崎)再編整備基本計画検討委員会, 1994.
- 4) 県立図書館(紅葉ヶ丘・川崎)再編整備実施基本計画検討委員会編. 県立図書館(紅葉ヶ丘・川崎)再編整備実施基本計画検討報告書. 県立図書館(紅葉ヶ丘・川崎)再編整備実施基本計画検討委員会, 1995.
- 5) 神奈川県教育委員会編. 県立図書館(紅葉ヶ丘・川崎)リニューアル計画. 神奈川県教育委員会, 1996.
- 6) 前掲3) はじめに.
- 7) 前掲3) p. 23.
- 8) 前掲4) p. 14.

- 9) 前掲 4) p. 14.
- 10) 長尾真. 電子図書館. 岩波書店, 1994, p. 52.
- 11) 前掲 4) p. 17-19.
- 12) 前掲 4) p. 17.
- 13) 前掲 4) p. 15.
- 14) 前掲 4) p. 14.
- 15) 前掲 4) p. 22.
- 16) 前掲 5) p. 25.
- 17) 前掲 5) p. 33.
- 18) 県立図書館再編整備構想は、県が 21 世紀を展望し、1997 年度から 10 年間の施策を定めた「かながわ新総合計画 21」に組み込まれた。両県立図書館のリニューアルはしたがって、県の総合計画に基づいて行われたとも言うことができる。
神奈川県企画部政策調整室編. かながわ新総合計画 21. 神奈川県企画部政策調整室, 1997, p. 90.
- 19) 若杉秀子. 県立川崎図書館のリニューアル. 神資研. 1998, no. 32, p. 7.
- 20) 前掲 5) p. 32-33.
- 21) クラスタの導入について. PaReT 科学と産業の情報ライブラリーニュース. 1998. 6, no. 13.
- 22) 神奈川県立川崎図書館編. 神奈川県立川崎図書館 50 年史. 神奈川県立川崎図書館, 2008, p. 87-99.
- 23) 実際に起きたこれらの問題に対しては、代本板の設置や館内サインの工夫により改善を図ってきた。
- 24) 県立川崎図書館だより : クラスタの導入について. こあ. 1998. 4. 10, no. 169. 前掲 21)
- 25) 西野一夫. 応援団のつもり… . 神資研. 1998, no. 32, p. 25.
- 26) 森谷達典. 川崎図書館の活用法③. 神資研. 1998, no. 32, p. 15.
- 27) 村橋勝子. 理念をすべての活動に浸透—外から見た県立川崎図書館—. 神資

- 研. 1998, no. 32, p. 20.
- 28) 前掲 25) p. 25.
- 29) 大塚敏高. 「科学と産業の情報ライブラリー」を目指す神奈川県立川崎図書館の挑戦. 専門図書館. 2001, no. 185, p. 44.
- 30) 前掲 5) p. 33.
- 31) 前掲 5) p. 27.
- 32) 鈴木良雄. 公立図書館の戦略的事業展開～川崎図書館の挑戦. 情報管理. 2007, vol. 50, no. 8, p. 508.
- 33) 前掲 4) p. 17.
- 34) 前掲 4) p. 15.
- 35) 「新たな県立図書館・実施計画 (H24. 3) と明日プロ (「明日の県立図書館づくり」プロジェクト) 『新・図書館構想 (案)』との関連について」2013 年 8 月 8 日 (職場研修資料)